

◆第 23 回獨協大学全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト 予選講評◆

第 23 回獨協大学全国高校生ドイツ語スピーチコンテストにたくさんのご応募をいただき、まことにありがとうございました。今回の応募者数は、第 1 部 175 名、第 2 部 20 名、第 3 部 11 名、延べ 206 名となりました。

去年は新型コロナウイルスの感染拡大により、スピーチコンテストを開催できなかったこともあり、今回このように多数の応募があったことをたいへん嬉しく思います。いまなお生活がさまざまな制約を受ける中、今回のスピーチコンテストはドイツ語を学ぶ高校生にとって、授業以外の時間にドイツ語を練習する貴重な機会となることと思います。

第 23 回獨協大学全国高校生ドイツ語スピーチコンテストには、さまざまな工夫を凝らしております。たとえば第 1 部の朗読部門では、三種のテキストを選択肢として提供したうえで、さらにテキストを応募者がみずから自由に選ぶことも可能としました。今回は感染予防の観点から、これまで第 2 部として実施していた対話部門を休止し、プレゼンテーション部門を新設しました。日常生活に密着したトピックについて、パワーポイントなどの視覚的なツールを活用しながら発表するものです。プレゼンテーションという形式は、教育やビジネスの場において重要な役割を果たしておりますが、すでに日常的な会話ができるレベルに達している高校生にふさわしい表現形態としてかねてより要望が多かったものです。第 3 部のフリースピーチ部門は、これまでの実施形態を基本的には踏襲しつつも、「社会的なテーマを扱う」という条件を新たに加えました。応募者数が多かったばかりでなく、特に第 2 部と第 3 部の応募作品の質が一貫して高かったのは、こうした変更点を考慮するととりわけ喜ばしいことです。

第 1 部においては、応募者がみずから選んだテキストを朗読する際に、その文学作品に対する各自の解釈が示されることとなりますが、いくつかの作品については、もう少し準備と熱意があればもっと良い結果が得られたのではないかと印象を受けたことは否めません。第 2 部のプレゼンテーション部門では、今回は「私の学校」というテーマを設定しましたが、応募作品は、同じ学校出身者であってもそれぞれ異なる視点からアプローチしており、興味深いものでした。第 3 部のフリースピーチ部門においては、現代の重要な社会問題に関連する幅広いトピックが出揃いました。

このようにバリエーションに富む作品のうちから、技術力や独自性が際立ち、ステージでの発表に最も期待を寄せることができる作品を選び出すのは、われわれ審査員にとって非常に難しい作業でした。そのため、今年は想定していたよりも多くの作品を本選に選出することとなりました。

残念ながら、優秀な作品であっても選考で落とさざるを得ない場合が生じてしまうのがこうしたコンペティションの常です。われわれ審査員は、すべての応募者の皆さんの勇気を祝福し、その努力に大きな敬意を表します。この講評が皆さんのさらなる成長に寄与することができれば幸いです。また、皆さんがこれからも楽しくドイツ語を学ばれることを願っております。

※残念ながら、録音状態が万全でないものが散見されました。今後ご応募の際には、雑音の有無、録音レベルなどについて十分ご確認くださいようお願い申し上げます。

<第1部（朗読部門）>

第1部の課題テキストは、詩としてだけでなく歌としても広く知られるハインリヒ・ハイネ（1797-1856）の「ローレライ」、エーリヒ・フリート（1921-1988）の詩「問いと答え」、フランツ・カフカ（1883-1924）の寓話「掟の前で」（抜粋）の三種でした。応募者自身が選んだテキストには、村上春樹（1949-）の「4月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて」、リヒャルト・ジュネ（1823-1895）の「春の声」などがありました。

「ローレライ」はかなり短い行とシンプルな短文で構成され、一見簡単そうに見えます。各節の一行目と三行目、二行目と四行目が韻を踏んでいます。二行目のリズムは全体を通して似通っていますが、それぞれに小さなずれがあります。穏やかな流れの中で、細かい変化をつけながらこのリズムを拾い、同時に単調に聞こえないようにするのは容易なことではありません。応募者の中にはこれをうまく達成している人もありました。効果的な方法の一つは、各行の中で最も重要な意味を担う言葉に集中することです。こうした単語を、いわば「その単語に向かって」読むことにより、はっきりと強調することが大切です。各行の中でどの単語が最も重要であるかについては解釈の余地がありますが、行の最初や最後の単語であるとは限りません。応募者のうちには、この点も巧みにこなしている人がありました。自分なりの解釈を表現するための工夫としては他に、導入から本篇の始まりにかけての切り替え部分の表現、「Ich glaube」という独特な挿入文の読み方、「wildem Weh」や「hinauf in die Höh」のように共通の語頭が繰り返される部分の表現などが考えられます。最後に、それぞれの行が表すものと結びついた感情を具体的に思い浮かべることが良い方法で、感情表現を洗練させるのに役立ちます。

言語的には「問いと答え」という詩の方が格段にシンプルです。大半の語彙や表現は多くの応募者にとって、ドイツ語学習の過程ですでに馴染み深いものだったに違いありません。それが哲学的な対話のような詩のうちに現れるのですから面白いですね。問いの部分は、前半では間接疑問文の形、後半では直接疑問文の形で表現されているのですが、こうした問いと答えの交互性をうまく表現することが、この詩を上手に朗読するためのポイントです。多くの応募者がこの課題に成功していました。この詩は自由詩の形式で書かれていますので、リズムは自分で作ることができます。問いと答えの間の転換だけでなく、各行の重みを強調するためにも、間を十分に取ることが大切です。そしてここでも、一行のうちで最も重要な意味を担う単語に集中するという戦略が有効です。この点に注意を払っていれば、解釈の説得力がさらに増していただろうと思える応募者が多くいました。

謎めいた寓話「掟の前で」は、難しい語彙や、主節と従属節からなる長い文の構造が多く見られ、言語的には三つのテキストの中で最も難解です。ここでも、重要な単語に注目することで、長い文の中で迷子にならずに済みます。ちなみに長い文を練習するときのコツは、右から左へゆっくりと積み上げていくことです。一文の最後にある単語群を最初に練習し、そこにその前の単語群を加えていくようにします。まず「in das Gesetz」、次に「um Eintritt in das Gesetz」、そして「und bittet um Eintritt in das Gesetz」といった具合です。ただしこのカフカのテキストには、一人の語り手に加えて二人の登場人物がいるため、演技力を示す絶好の機会ともなります。三役の声を使い分け、その人物の性格や雰囲気話し方で表現すれば、一部の応募者が試みていたように、心に響く演技ができます。

言うまでもなく、個々の音のドイツ語での発音を事前に知っておくのも大切なことです。その上ではじめて、テキスト全体を組み立てることができるのです。すべての応募者にお送りする「ジャッジシート」には、各自が取り組むべき個々の音についての詳細なフィードバックが記載されています。先生や教科書の助けを借りるだけでなく、インターネットでも調べてみましょう。専門的なウェブサイト (<https://soundsofspeech.uiowa.edu/german> など) のほか、Youtubeにもさまざまなビデオが上がっていますが（非専門家が制作した、必ずしもお勧めできないものもあります）、獨協大学でも日本の学生のために発音練習用のウェブサイト (<http://phonetik.sakura.ne.jp>) を制作していますので、ぜひ参考にしてください。

<第2部（プレゼンテーション部門）>

第2部の課題は自分の学校を紹介することでしたが、この部門の応募作品のレベルの高さには特筆すべきものがあり、そのため当初意図していたよりも多い応募者が予選を突破することとなりました。

内容の理解に支障があるような作品はほとんどありませんでしたが、われわれ審査員にとりわけ興味深かったのは、応募者が自分の学校を、統計的なデータ、建物の配置、学校の理念、提供される教育、他の学校との違い、学校での一日の再現、図書館のガイドツアー、学校が与えてくれたものなど、それぞれに大きく異なった、時にきわめて独創的な視点で紹介していたことでした。ほとんどの応募者が、知っている語彙や文法を駆使しており、日常生活の重要な部分についてはこれまでに学んだことを使ってすでに表現できることが示されていました。これにはとても感銘を受けました。また多くの作品が、明確で論理的な構成、優れた導入部、よく練られたメインパート、まとまりのある結論を備えていました。

本選に向けては発音を鍛えることが重要になります。一文の中でのアクセント、リズムの滑らかさ、間の取り方、そしてもちろん個々の音の発音といったことです。表情やジェスチャーで表現を豊かにすること、さらにはパワーポイントなどの視覚的ツールのデザインや活用方法も重要になります。いずれにしても、この部門の初演をステージ上に見出せることを、審査員はすでにたいへん楽しみにしています。

<第3部（フリースピーチ部門）>

例年と同様、第3部の応募作品は高い水準にありました。今年は初めての試みとして、社会的な問題に明確に言及したテーマを選ぶことを条件としました。ほとんどの応募者がこの点に十全に注意を払っていたため、審査員は、環境問題、多様性、地域言語、世界的な貧富の格差、フェアトレード、オンライン教育の可能性などをテーマにした、非常に独自性の高い優れた作品の中で選別を行わなければなりませんでした。

多くの応募者が自分自身の経験に基づいた論述を行っており、論旨は非常に鮮明でした。審査員が重視した点は、提示する問題を一方的に検討するだけでなく、その問題の解決に向けて明確な方向性を示したり、問題を多様な視点から照らし出したりしていることです。また多くの作

品で、事実に基づいて論旨が展開されています。自身の主張を裏付けるのに適した事実が選ばれ、信頼できるソースから採られていて、さらに適切に引用されていれば、もちろん説得力が増します。自分の意見を明確に述べていなかったり、論拠を示していなかったり、事実の羅列に終わっていたりする文章は、十分な独自性がないとみなされます。また社会的な視点を含まず、個人的な問題に終始しているだけの文章は、たとえ言語的に優れていても本選には選ばれませんでした。明確な構造を持ち、各部分が相互に関連し合い、全体として「まとまりのある」印象を与える文章が、特に本選に相応しいものと考えられます。

言語的な構成に関しては、ネイティブチェックは文法的な誤りに限定されるべきであることをお伝えしたいと思います。ネイティブスピーカーが手を入れていないとわかるテキストが、その点によって不利になることはありません。例年どおり、自身も持っている言語的な手段を可能な限り駆使して、自分の考えを相手に伝えられる文章を自ら書くことを推奨したいと思います。

今回もまた大多数の応募者がきわめて優れた作品を仕上げていましたので、第3部での審査員の選別は容易ではなく、独自性の高いテキストのうちにも選ばれなかったものが少なくないことを付言いたします。

予選を突破したスピーチがステージ上でどのようなインパクトを与えるのか、その後の質疑応答も含めてたいへん楽しみです。